井関隆子日記　　御救い米事件に関連した記述

井関隆子（天明５年生まれ）は、天保 11 年(1840）から 15 年(1844)10 月までの４年 10 か月にわたる日記の他、いくつかの作品を残している。

息子（実際には先妻の子）の井関縫殿頭親経が江戸城の御広敷御用人となり、11 代将軍家斉の正室・広大院（松の方）の係だった関係で、江戸城内の出来事がすぐ耳に入る立場にあり、日記には日常の出来事以外に、普通の市民では窺い知れない城内での出来事、人事異動などが書かれている。

井関隆子日記・全12冊
（桜山文庫蔵）

この日記の中に、五郎左衛門の名こそ出ては来ないが、御救い米事件や、それに関連する奉行所内の刃傷事件にも触れ、筒井、矢部、鳥居の町奉行職の任免にまつわる話を伝えている。　特に矢部には好意的な記述が多く、伊勢桑名で餓死したくだりまで書きとめられている。

天保 12 年４月２９日　　幕府の人事異動について

昨日、さるべき司の人々、かれこれ召されて其職共かはれりとか。　さる中にてはさいはひ（幸）得たるあり、はたおとされたるあり。　楽しみ悲しみゆきかふ様、目の前にいちじるし。　（後略）

５月３日　　矢部駿河守が町奉行に任じられた事について

矢部左近将監と聞こゆるは、去年の冬、小普請支配てふ司に召され、此旅は町の司（町奉行）に移されぬ。　水戸中納言斉昭卿は、お国におはしけるが、此春ふりはへたる御使ありて、召上げられたる喜びとて、かれたる餉（かれい）を送られ、はた短冊に歌を書きてとらせ給へたりとぞ。　其の歌は

　　鶯の　谷より出る　声するは　また立かへる　春のしるしか
「この殿に親しうもあらぬ人なるに、かくとひ給へるは、思うところおはしなめり」とある人語りぬ。

12月３日　　筒井紀伊守の町奉行罷免について
（内藤岩五郎、後藤駿河守、吉松吉五郎などの左遷を記した後）**筒井紀伊守**はさりし頃、町の司より西の殿の御留守居になりぬ。　此人、町の司たりし時、其下司公（おおやけ）に納むべき黄金を、己が奢りにいみじう使ひたる、其事どもあらわはれ、此頃御糾しありなどといふはまことか。　（後略）

12月23日　矢部駿河守の町奉行罷免について
町の司、**矢部駿河守**と聞こゆる、母の失せたりしかば、其おもひにこもりしより、打はへ久しう引きこもりおりと聞こえしが、思し召しありとて司はなたれ、差扣へ仰せ付けられぬとぞ。　此人、もとより世のかいなでは、いたう変りて、其心雄々しく、いいささか私なく、公事のあやしう後めたき筋ども正さるるに付て、去りがたき節々申たてつるに、さてはーノ司よりはじめさはる人々いと多くて、中々にかうしづみぬることを、いと心苦しう世に言ひあへりとか。　此人、おのが思ふ筋正さば、事にあたらむこととかねて知つれど、さればとて其司として、世にへつらひてやむべき事ならずと、思ひとりたるなめりと、おしむ人多かりとなむ。　此司より御留守居にうつされたる**筒井伊賀守**のあづかりたる時のひがことなど、近頃ほころびたる、其事共によれりとか。　此矢部の某は今年うつされたる司也。　猶、人のいひ騒ぐ事あれど、不用なればとどめつ。

12月28日　　鳥居耀蔵の町奉行任命について
町の司は、御目付久しう仕うまつれる**鳥居耀蔵**とか聞こゆる召れたりとぞ。　この外、彼是うつされたる人あめれど、不用なるはもらしつ。

天保13年３月23日　　判決の翌々日
かの前町の司なりし**矢部駿河守**、ひとひ司召放たれ、さしこもりぬと聞こえしが、猶罪さりがたきなめり、昨日松平和之進と聞こゆる国の守へお御預になり、其家滅びたるとぞ。　其罪の条々おふせ給う書付を見るに、世にもともかく沙汰しつる如く、ひととせ（一歳）世の中いたう飢えたりし時、救い米あまた出けるを、此人、其折御勘定奉行たり。其時下司の者共、わたくしごと有て徳つきたるが、同じ輩（ともがら）のうちに恨み憤る者ありて、其後町の司になりし初め、役所にて恨みある某を切殺し、己もみずから失せたりと聞こえしが、そ

れらのかうがえ正しう行き届かず、申しわけなど前後打ちあわず、其職に堪えずとて罪にあて給うよし也。　はた夫にかかづらいたる者ども罪に行はるる中に、命召さるる者もあり。　はた家継がすべき子は、松平内匠頭と聞こゆる、其末の子にて、いまだ若くて父のもとにおるをも、養親のとがにより、改易せられぬとぞ。　此人の妻は泉本某と聞こえて田安の殿に仕うまつれる娘也。　すべて此ゆかりにかかれる人皆つつしみおれり。　かの北村法印も従兄弟にて息子湖南は婿なれば、門さしこめおれりとぞ。　さまざま罪にあたる人のある中に、是は珍らかなりとて、世にいぶかしみ、ささやく事多かりとなむ。　はた筒井伊紀伊守も同じやうなる御咎なれど、是は司放たれ慎みおれりと聞こゆ。

５月１１日　　矢部の桑名出立について

かの**矢部の某**は、主の守にともなわれて、伊勢の国におもむきぬとぞ。　其旅だつ時、詠めりし歌とて語るを聞けば、

　　君をおもふ　心ばかりは　かはらずよ　かはりはてたる　わが身なれども

まことにかくあかき心ならむには、いとあはれなる事なれど、人の心は親はらからだにはかられず、ましていかがは。

８月７日　　桑名における矢部の憤死について

矢部の某は、伊勢の桑名にて身まかりぬとて、見届けの御使たつと聞こゆ。　世に沙汰するを聞けば、此人近頃絶えて物言はず、はた物を露喰はで、わざとはかなくなりたりとか。　年は五十ばかりなれど、まだ若こうあたらしう見へしとか。　求めて死にけむほどの心地えもいひしらず、聞くだにいとおそろし。